

この世における聖化：
靈的戦いにおけるクリスチャンの守り
第一ペテロ 1 章 14-16 節

ロバート・D・ルギンビル博士著

https://ichthys.com/Pet30.htm#N_1_

からの訳文

第一ペテロ 1 章 14-16 節

(14) 従順な子どもとして、真理を知らなかった以前の無知な時代に従っていた欲望に、もはや従ってはならない。(15) むしろ、あなたがたを召してくださった方が聖なる方であるように、あなたがた自身も生活のすべてにおいて聖なる者となちなさい。(16) 「あなたがたは聖なる者でなければならない。わたしが聖なる者だからである」([レビ記 11 章 44 節](#))と書かれているからです。([第一ペテロ 1 章 14-16 節](#))

これまで見てきたように、新約聖書で「聖さ」という概念を表す言葉は、ギリシヤ語の hag (ハグ。例: Hagia Sophia [ハギア・ソフィア]) という語根に由来しており、ラテン語訳聖書 (ウルガタ) では サンクトゥス sanctus に由来する語群によって訳されています。そのため、「聖化された (sanctified)」と「聖なる (holy)」は、それぞれラテン語系とゲルマン語系に由来する異なる形容詞ではありますが、どちらも聖書における同じ概念を表しています。つまり、日常では「聖化」と「聖さ」という言葉から異なる印象や意味を受ける人がいるかもしれませんが、実際には両者はまったく同じ聖書的概念、すなわち「罪と悪から分けられること」を意味しています。

また、救いと同様に、聖化も神によって信者に対して三つの段階を経て実現されることを見てきました。私たちは今、まだ復活も報いも受けてはいませんが、神の御前ではすでに「救われた者」とされています。同じように、キリストを信じる者は、まだ罪を犯すことのできない完全な体を与えられてはいませんが、神の目にはすでに「聖なる者」とされています。この「立場としての聖化 (および救い)」と、「最終的な聖化 (および救い)」との間にあつて、私たちはこの世を、私たちの主の足跡に従って歩み、主が行うよう望まれることを行い、避けるよう望まれることを避けようと努めています。この「経験としての聖化」こそ、ペテロがここ [第一ペテロ 1 章 14-16 節](#) で語っていることです。そして、

この世にあって私たちが、今戦っている信仰を守る戦いを通して「自分の救いに取り組んでいる」([ピリピ 2 章 12 節](#))ように([第一ペテロ 1 章 5 節, 9 節](#))、それと同じように、そして実際にはその戦いの一部として、私たち信者は、主の御前を聖く歩もうと努めなければならないのです。

(3) 神のみこころは、あなたがたが聖なる者となることである(すなわち、罪から離れることである)。すなわち、不品行を避け、(4) 各自が自分の器(すなわち自分の体)を、聖さと尊厳をもって治めることを知り、(5) 神を知らない異邦人(すなわち不信者)のように情欲に支配されず、(6) このようなことによって兄弟姉妹を踏みつけたり、欺いたりしないことである。これらすべての罪について、主は報復される方であることを、私たちは以前からあなたがたに警告し、厳かに証ししてきた。神は私たちを汚れのためではなく、聖なる歩みのために召されたのである。([第一テサロニケ 4 章 3-7 節](#))

前回の学び([ペテロシリーズ #29](#))では、この箇所在先立つ節で、ペテロが、イエス・キリストの兵士として私たちが携わっている霊的戦いにおいて、しっかりとした攻勢の姿勢を保つことの重要性を強調していることを見ました。しかし、なぜペテロは、ここ[第一ペテロ 1 章 14-16 節](#)で聖化と聖い生活を勧める前に、主として私たちの心、すなわち内なる人において戦われる霊的攻勢について語ったのでしょうか。今日の多くの教会では、罪を責めることが説教の中心となっており(そもそも教えが行われている場合でさえ)、霊的成長や前進、そのための方法については、ほとんど語られることがありません。しかし、その理由は明らかです。後に続くすべての良い行いのためには、まず真理において成長することが不可欠だからです。真の聖さは、真理に積極的に応答することに基づいています。それは、内側に何の変化もないまま、恐れから外見だけを取り繕うことではありません。

パウロもまた、同じ正しい順序でこのことを教えています。先ほど引用した箇所を見ると、「神のみこころ」を知り、それを行うことが、聖なる生活を送る第一の原則であることが分かります([ヘブル 10 章 35-39 節](#); [第一ペテロ 4 章 1-2 節](#); [第一ヨハネ 2 章 16-17 節](#))。もちろん、それは霊的に未熟な状態ではありません。神のみこころを、一般的な意味でも、自分自身の人生に関する具体的な意味でも本当に知るためには、まず霊的成熟に達していなければなりません。確かに、ある種の罪を避けることは、「聖なる者となりなさい」という聖書の命令の分かりやすい実践の一つです(もともと、それでさえ正しい動機から行うためには霊的成長が必要です)。しかし、ペテロがこの文脈で語っている聖化は、それだけではありません。物事が難しくなり、どちらの道が正しいのか容易には分からない時にも、聖い歩み続ける真の聖化には、一朝一夕に

は身につかない霊的成長が必要なのです。

堅い食物は成熟した者のためのものである。彼らは絶えず実践することによって、自分の判断力を訓練し、善悪を見分けることができるようになったのである。(ヘブル 5 章 14 節)

(9) 私はこう祈る。あなたがたの愛が、十分な知識(epignosis[エピグノーシス]、すなわち信じられた真理)と、あらゆる識別力において、ますます豊かになるように。(10) その結果、何が最も良く、何があなたがたのなすべきこととしてふさわしいかを見分けることができ、キリストの日に至るまで純真で、人をつまずかせることのない者となり(すなわち、キリストのさばきの座で最大の報いを受けるために)、(11) イエス・キリストによる義の実に満たされて、神に栄光と賛美が帰されるようになるためである。(ピリピ 1 章 9-11 節)

(1) だから兄弟たちよ。神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたの体を、生きた供え物として神にささげなさい。それは神に喜ばれるものであり、これこそあなたがたの霊的な「祭司としての奉仕」である。(2) この世に合わせてはならない。むしろ、心を新たにすることによって造り変えられなさい。そうすれば、神のみこころ、すなわち何が良く、神に喜ばれ、正しいことなのかを見分けることができるようになる。(ローマ 12 章 1-2 節。参照:ローマ 2 章 17-18 節)

(5) 奴隷たちよ。肉による主人に対して、恐れおののき、真心をもって、主に従うように従いなさい。(6) 人に気に入られようとして、見られている時だけ仕える者のようではなく、キリストのしもべとして、心から神のみこころを行いなさい。(7) 人にではなく主に仕えるように、喜んで仕えなさい。(8) あなたがたは、一人ひとりが行った良いことに対して、奴隷であっても自由人であっても、主から報いを受けることを知っているからである。(エペソ 6 章 5-8 節)

したがって、真理を知り、その真理を信じることは、聖さについての聖書の命令を実践するために不可欠なのです。

「真理によって彼らを聖別してください。あなたのみことばは真理です。」(ヨハネ 17 章 17 節/NIV 訳)

したがって、主が望まれるように聖なる生活を送るためには、霊的成長が鍵となります。それは、聖書を学び、堅実で内容のある教えに耳を傾け、その真理を信じることに

よって、何が正しく何が間違っているのかを知るようになるという理由だけではありません。たいていの場合、そのことは、最も未熟な信者にさえ明らかでしょう。むしろ、霊的に成長することによって、私たちは誘惑をよりよく退け、これらの命令を最後まで実行する力を得るとともに、イエス・キリストとの関係が深まることを通して、自分自身を正しく動機づける方法も学ぶのです。私たちは欺かれにくくなるだけでなく、特に誘惑を受けやすい状況や時に至るまでの選択において、より慎重になるでしょう。それだけでなく、試されて確かなものとなった霊的品性、すなわち神の御言葉の真理によって強められた揺るぎない信仰を育てるようになります。その真理は、抵抗するためのより大きな力を私たちに与え、また、イエス・キリストとの聖なる歩みを脅かすように少しでも見えるあらゆるものに対して、どのように抵抗すべきかについての知恵をますます与えてくれます。私たちは日ごとに、この方をいっそう喜ばせたいと願うようになっているのです。

悪のように見えるものは、どのようなものであっても避けなさい。(第一テサロニケ 5 章 22 節)

覚えておくべきことですが、エバは欺かれたためにつまずきました。私たちが聖書の真理をより多く知り、知った真理をより深く信じるほど、無知のために誘惑に陥る可能性は低くなります。真理は、この種の無知への隷属から私たちを解放します。それは、罪の性質についての無知だけでなく、誘惑をさらに危険なものとする敵の性質とその策略についての無知からも、私たちを解放するのです。そしてこの自由は、私たちが信仰によって心に受け入れた真理のうちに堅く立つ決意さえあれば、聖霊によってより効果的に抵抗する力を与えてくれます。

(31) そこでイエスは、ご自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「もしあなたがたがわたしの言葉にとどまるなら、あなたがたは本当にわたしの弟子である。(32) そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にするであろう。」(ヨハネ 8 章 31-32 節)

私たちが霊的に成長する時、避けるべきものを学ぶだけではありません。いつも堅く結びついているべき方、すなわち私たちの愛する主であり救い主であるイエス・キリストについて、さらに多くを学ぶのです。主について、また主が私たちに与えてくださった御言葉について学び、信じるすべてのすばらしい真理は、時とともに、この人生、この世、そしてこの世における私たちの歩みに対する考え方全体を変えていきます。実際、私たちを真に本質的に変えることのできるものは、神の御言葉の真理だけです。本当の霊的变化は、外側から内側へ押しつけることはできません。どのような規則や

規定であれ、それを自分に課すことによって、あるいは他人から課されるままにすることによって、私たちは「聖なる者」となることはできません。規則は罪の性質によって破られるためにあるようなものであり、どれほど注意深く作られた「規範」であっても、それに従おうとする人々を人為的に抑えつける以上のことは決してできません。外側を白く塗っても、内側で起きていることは変わりません。「聖なる者となちなさい」という動機そのものは純粋であっても、その聖さへの命令を実行する力は、肉の努力だけでは得られません([ローマ 7 章 7-25 節](#))。信者は、内側から本当に変えられることによってのみ、イエス・キリストと積極的に歩む力を得ます。その歩みは、定義上、肉のものを避けるものであり、こうして愛の律法を成し遂げるのです([ローマ 13 章 10 節](#))。

これらすべては、一般的な意味においてだけでなく、クリスチャンの歩みが実際にどのように成り立つかという点においても真実です。私たちが主に近づけば近づくほど、主は私たちにとってより現実的な存在となり、主を愛し、主を喜ばせることが、この世での一步一步に欠かせないものとなっていきます(単なる口先だけのものではなくになります)。そうなればなるほど、圧力や誘惑が迫ってきた時に、この態度と積極的な願いによって支えられる可能性も高くなります。完全な人は一人もおらず、この人生で罪のない完全さに達する信者も一人もいません(それと反対の教えは危険な偽りの教理です。[ローマ 3 章 23 節](#); [ヤコブ 3 章 2 節](#); [第一ヨハネ 1 章 6-10 節](#))。しかし、私たちは「わたしが聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者でありなさい」という命令を実行する点で、日ごとに良くなっていくことができますし、そうすべきであり、実際そうならなければなりません([第一ペテロ 1 章 16 節](#))。そして、そのために実証されている唯一の方法は、真理の御言葉を聞き、学び、信じ、適用することによって、日ごとに霊的に成長し続けることなのです。

真理によって彼らを聖別してください(すなわち、彼らを聖さへと導いてください)。あなたのみことばは真理です。([ヨハネ 17 章 17 節](#)/NIV 訳)

あなたがたは今、真理に従うことによって心を聖めたのですから、偽りのない兄弟愛をもって、互いに熱心に愛し合いなさい。([第一ペテロ 1 章 22 節](#))

このように、真の聖化、真の聖さは、真理を信じ、次にその真理に従って行動することから生じます。これこそ聖書が命じている真の変化、すなわち外側から内側へではなく、内側から外側へと起こる変化です。単に外側を白く塗ったり、人為的な「聖さ」を無理に作り出すために何らかの制限を課したりすることではありません。

あなたに罪を犯さないために、私はあなたのみことばを心に蓄えました。([詩](#)

[篇 119 篇 11 節](#)/NIV 訳)

前回、私たちは、クリスチャンが霊的戦いにおいて勝利を得るために与えられている方法について学びました。その際に見たように、効果的な霊的防御(すなわち誘惑を退けること)は、効果的な霊的攻勢(すなわち真理の教えに耳を傾け、その真理を信じ、聖霊の力によってそれを一貫して実践することを通して、キリストにあって成長すること)なしには、事実上不可能です。実際、霊的成長と聖さを保つことは互いに協力し合う切り離せない営みです。攻勢は防御を助け、防御は攻勢を助けるからです。私たちが真理をより多く学び、それを信じるほど、誘惑(そしてそれを差し出す悪しき者)の欺きは、その本当の姿のままに見抜きやすくなります。同時に、主についての知識、主の犠牲、主の善良さ、そして私たちのために進められている神のご計画を知ることによって深まる主への愛と、主を喜ばせたいという願いによって、誘惑に効果的に抵抗できる可能性も高まります。同じように、私たちが罪に対する勝利を少しずつ得るようになると、それは霊的な確信を強めるとともに、いのちにもまさって愛する主との関係性に対して、本来であれば与えてしまうはずの損害を少なくしてくれます。

従順な子どもとして、真理を知らなかった以前の無知な時代に従っていた欲望に、もはや従ってはならない。[\(第一ペテロ 1 章 14 節\)](#)

プラトン主義とは異なり、聖書に基づくキリスト教は、知識だけでは必ずしも正しい行動を生み出さないという真理を教えています。しかし、ペテロがここで述べているように、真理についての無知が、誘惑や情欲、そしてあらゆる種類の罪に屈する大きな原因であることも事実です。私たちが罪とは何であるかをより深く認識するほど、それを避けようとするようになります。神の命令に背いた時に受ける神からの懲らしめについて理解が深まるほど、そのような誘惑に直面した時、より思慮深く行動するようになります。また、この戦いを勝ち抜いた者たちに約束されている、言葉では言い尽くせないほどすばらしい永遠の報いについて理解が深まるほど、クリスチャンの戦士としての働きを損ない、ゴールを目指す競走を遅らせるようなものは何であれ、徹底して避けたいと願うようになります。[\(第一コリント 9 章 24-27 節\)](#)。さらに、私たちの愛する主であり救い主である方を知れば知るほど、主との歩みは親しいものとなり、私たちの罪を負い、ご自身の血によって死から贖ってくださった主の御業をますます深く感謝するようになります。そして、主を喜ばせることは何でも行い、主を悲しませることは何一つしたくないと願うようになるはずです。少なくとも、そうあることを期待したいものです。

もちろん、これらの原則(そして他にも多くの原則)が成り立つ土台となる真理を、深く、詳しく学ばなければなりません。そして、それらを心から信じなければなりません。

そうする時、この世における聖化、すなわちキリストの真の使節として生き、行動することは、次第に自然なものとなり、私たちの主との聖なる歩みも、ますます一貫したものになっていくでしょう。

ですから、愛する者たち。このような約束を与えられているのですから、肉と霊のあらゆる汚れから自分を清め、神を畏れる中で聖化を完成させようではありませんか。[\(第二コリント 7 章 1 節\)](#)

この節では、永遠のいのちと復活の日に与えられる大きな報いという「約束」が、聖化を追い求めるための動機として示されています。また、ここで言われている「神を畏れること」は、神の不興や神の懲らしめを恐れる敬虔な畏れを含みますが、決して滅びへの恐れを意味するものではありません。私たち信者は、信じ続けている限り、自分の救いについて完全に守られています(この点で唯一恐れるべきことがあるとすれば、それはキリストへの以前の信仰を完全に捨て去ることによる完全な背教だけです)。使徒パウロは別の箇所で、このような敬虔な畏れが、私たちが聖さを生活の優先事項とし続ける助けとなることを、さらに具体的に説明しています。

(10) 私たちはみな、キリストのさばきの座の前に立たなければならない。それは、それぞれが、この体を通して行ったことに応じて、良いことであれ、価値のないことであれ、その報いを受けるためである。(11) だから、私たちは主を恐れることを知っているので、人々を説得しようと努めている。神は私たちを、そのありのままに知っておられる。そして、あなたがたの良心にも、私たちが本当にどのような者であるかが明らかにされていることを願っている。[\(第二コリント 5 章 10-11 節\)](#)

新しく生まれ、キリストにある者として安全に守られている私たち信者にとって、聖なる歩みをしなかったことに関する唯一持つべき「恐れ」とは、「価値のない」歩みのために、キリストのさばきの座で叱責を受けることへの恐れです。聖くない生活は、真の霊的成長、前進、実りを妨げ、それらと相容れないものです。それはちょうど、霊的成長が、主との真に聖なる歩みに不可欠な要素であり、その力強い動機づけとなるのと同じです。「この体を通して」行ったことに対して報いを受ける日 [\(第二コリント 5 章 10 節\)](#) を待ち望むことは、聖なる歩みをしている前進中の信者が常に心に留めているべきことです。

一方、私たちが霊的に前進せず、主との聖なる歩みを保っていないなら、そのような失敗が、この地上でどのように時間を費やしたかを表している限り、報いではなく叱責

がその結果となることを、私たちは(聖霊によって)直感的に知っています。一度の失敗で報いを失うわけではありません。それは、一度の成功だけで報いが得られるわけではないのと同じです。しかし、どのような失敗も、この戦いにおいて私たちを不利にします。それは、一つ一つの勝利が永遠の報いに積み重ねられていくのと同じです。

先にも述べたように、聖化(防御)は、霊的成長、前進、実り(攻勢)と切り離すことはできません。もし信者が前者を持ちながら後者を欠いているなら、前進し続ける力がないために、真理が不足し、時がたつにつれてますます無防備になり、その前進の勢いを失っているがゆえに、ますます弱くなってしまいます。逆に、もし信者が真理を学び、それを信じることによって熱心に霊的成長を追い求めている、罪に対してだらしない態度を取り続けるなら、その良い努力は損なわれ、その証しは弱められ、増え続ける神の懲らしめに対処しなければならなくなるために霊的前進は複雑になり、そのねじれが正されるまでは、困難な試練を乗り越えることも事実上不可能になってしまいます。

罪に対する聖なる防御を保つことと、神の御言葉の真理を喜びをもって受け入れ、その真理をこの人生のあらゆる試練に適用すること(そして機会があれば他の人々にもそうするよう助けること)とを結び合わせることによってのみ、信者はキリストが私たちに与えられた使命を果たし、主の言葉に耳を傾け、それを正しく心に留めるすべての者のために主が用意しておられる大いなる報いにあずかることができるのです。

「もしあなたが正しいことを行うなら、受け入れられるではないか。しかし、もし正しいことを行わないなら、罪は戸口で待ち伏せしている。その欲望はあなたに向かっている。しかし、あなたはそれを支配しなければならない。」([創世記 4章 7節](#)/NIV 訳)

主がカインにこのことを告げられた時、カインは救われておらず、主に対してまったく敬意を払っていませんでした(その後、弟アベルを殺した彼の行動が、そのことを明らかにしています)。ここで私たちにとって重要なのは、たとえカイン自身はそうすることに失敗したとしても、不信者でさえ罪への誘惑を「支配する」ことができるということを、主ご自身から教えられているという点です。それは選択の問題です。そしてもちろん、道徳的に立派で、法律を守る善良な市民である不信者たちの生活の中に、この原則が肯定的な形で働いているのを、私たちはいつも目にしています。実際、不信者は、信者が間違いなくそうであるように悪魔の特別な標的とされているわけではないため、倫理的・道徳的に行動し、罪深い行為を控えることは、ある意味では信者よりも容易です。カイン自身は正しく応答しませんでした。この原則が私たちに教えているのは、たとえ非常に難しく思われる時であっても、私たちは実際に罪と誘惑に抵抗することが

できるということです。真理を少しも顧みず、聖霊の助けも持たない不信者でさえ、聖なる仕方で生きることができるのであれば(そして聖書も経験も、それが可能であることを十分に示しています)、私たちの内に住み、助けてくださる御霊を持つ私たちなら、なおさらそうすることができるはずです。そのため、特別な誘惑や依存、あるいは慢性的な罪深い行動が問題となっている場合、信者は自分自身に対して正直になり、立ち上がって、その問題に真正面から向き合う必要があります。私たちは、自分の自由意志を実際に自分で支配しているという事実を認め、受け入れなければなりません。そして御霊の助けによって、罪、誘惑、依存、その他、神の御言葉と神のみこころに反するあらゆる行動に対して、私たちは絶対に「ノー」と言うことができるだけでなく、絶対にそうしなければならないのです。

(16) しかし、私は言う。御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を実行することは決してない。(17) 肉が欲することは御霊のみこころに反し、御霊もまた肉の欲することに逆らうからである。この二つはこのように互いに真っ向から対立しているので、あなたがたがしていることは、自分自身が選んだことではない。(18) しかし、御霊に導かれているなら、あなたがたは律法の下にはいない。(19) 罪の性質の働きは明らかである。すなわち、不品行、汚れ、好色、(20) 偶像礼拝、魔術、憎しみ、争い、ねたみ、怒りの爆発、利己的な野心、分裂、党派、そねみ、(21) 酩酊、乱交、その他これらに類するものである。私は以前にも警告したように、今も警告する。このような生活をする者たちは、神の国を受け継ぐことはない。(22) しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、忍耐、親切、正しさ、信仰、(23) 柔和、自制である。このようなものに反対する律法はない。(24) 今、キリスト・イエスに属する者たちは、肉をその弱さと欲望とともに十字架につけたのである。(25) 私たちが御霊によって生きているのなら、御霊によって歩もうではないか。(ガラテヤ 5 章 16-25 節)

以上のことを成し遂げること、すなわち真に聖く、聖別された仕方で歩むことを学ぶのは、一晩でできることでも、努力なしに進む過程でもありません。それには、日ごとに、一步一步、この戦いに取り組む必要があります。私たちは人間ですから、失敗もしますし、後戻りすることもあります。しかし、完全な状態には達しなくても、御霊の助けによって、「わたしが聖なる者であるように、あなたがたも聖なる者となりなさい」という命令を果たすことにおいて、前進し続けることができます。ですから私たちは、困難な時にも、つまずき、失敗し、罪を犯す時にも(ローマ 3 章 23 節; ヤコブ 3 章 2 節; 第一ヨハネ 1 章 9 節)、なお「聖化を追い求め」続けなければなりません(ヘブル 12 章 14 節)。そして、私たちの主にならい、「生活のすべてにおいて」聖なる者となるよう努めなければなりません(第一ペテロ 1 章 15 節後半)。

従順な子どもとして：私たちは、信者である自分たちについてペテロが最初に用いたこの表現を、最後に取り上げることにしました。クリスチャンである私たちは、もはや「真理を知らなかった以前の無知な時代の欲望に従う」のではなく、聖化を追い求めるべきです。今や私たちは新しく生まれたのですから、以前の生活がどのようなものであったとしても、どのような罪深い行動をしていたとしても、不信者として送っていた生活の中に、この世的で主にふさわしくない面があったなら、それは今、捨て去らなければなりません。今こそ、不信者のように生きる生活から、信者としてふさわしく生きる生活へと変えられることを受け入れる時です。ペテロがここでこの対照を示しながら語っている「聖さ」の本質は、そこにあります。聖なる者であるとは、どういうことでしょうか。私たちはその反対が何であるかをよく知っています。すなわち、信じる以前の私たちの生活の型であった、何らかの「欲望に従う」ことです。したがって、聖さとは、何よりもまず、この世から離れて主に向きを変えることです。それは、主の真理に注意を向けるという積極的な行動によってのみ、本当の意味で実現できます。同時に、この世が当然と考え、普通とみなしている罪深い欲望に「従わない」ためには、意識的な努力も必要なのです。

(15) この世を愛してはならない。この世にあるものも愛してはならない。もし誰かがこの世を愛するなら、その人のうちに父への[真実な]愛はない。(16) この世にあるすべてのもの、すなわち肉の欲、目の欲、生活についての誇りは、父から出たものではなく、この世から出たものだからである。(17) この世とその欲は過ぎ去ろうとしている。しかし、神のみこころを行う者は、永遠に[神とともに生き続ける]。(第一ヨハネ 2 章 15-17 節)

御霊によってこの訴えをなすにあたり、ペテロは私たちを「従順な子ども」と呼んでいます。そしてそう呼ぶことによって、イエス・キリストのために聖なる生活を送るという課題に取り組むための、励ましと動機の両方を与えています。励ましとなるのは、私たちが子どもであり、生ける神の息子・娘であり、キリストのからだの一部であって、イエス・キリストへの信仰が確かであるのと同じほど、私たちの救いも確かで安全なものだからです。動機となるのは、従順は自動的に生じるものではありませんが、私たちの罪のために死んでくださった主が、今、私たちに聖さを求めておられると認識することは、当然、私たちの注意を引き、ここにある聖なる生活についての命令を果たすために、必要なあらゆる変化を自分の姿勢に加え始める助けとなるはずだからです。

ペテロは、私たちがふさわしく生きなかった場合に救いを失うと脅しているのではありません(実際、救いはキリストへの信仰に基づいているのであって、罪に関する私た

ちの行動記録に基づいているのではありません)。¹ また、聖なる仕方で生きなかったなら、厳しい神の懲らしめが下ると脅しているのでもありません(もっとも、この世の欲望や罪深い願いに「従わない」という命令に耳を傾けない信者には、重大な結果があることを、私たちは当然理解していなければなりません)。² むしろペテロは、神が聖なる方であり、私たちはその子どもとして神に属していることを思い起こさせています。もし私たちが、父に喜ばれる子どもでありたいと願うなら、どのように振る舞い、この箇所をどのように受け止めるべきかは、十分すぎるほど明らかなです。ペテロが私たちに示すこのたとえに従って考えるなら、人間の父親に従わない子どもたちは、自分自身の悪い行いのために、不必要に苦しい経験をするのを、私たちは知っています。その悪い行いのために息子や娘でなくなるわけではありませんが、罰を受けることにはなります。そしてそのような行動は、決して幸福へ至る道ではありません。ふさわしい懲らしめを受け、問題となった行動が正されて初めて、良い感情と交わりが回復されるのです。不従順な子どもであるより、従順な子どもであるほうがよいのです。また、完全な人は一人もいないのですから、罪過をできるだけ少なくし、それを最も軽い過失にとどめるほうがよいのです。しかし、自分勝手な行動によって大きな間違いを犯した場合でさえ、私たちはなお息子・娘であることに変わりはありません。正当な権威に従わなかったために両親を苦しめ、自分の生活を惨めにし、しばらくの間、両親との関係を悪くしたとしても、その事実は変わらないのです。

同じように、ペテロはここで、私たちが新しく生まれた神の子どもであるという立場を深く理解できるよう助けています。それと同時に、聖なる生活を送るという命令を最大限に真剣に受け止めるよう、非常に強い言葉で励ましています。父なる神と私たちの主イエス・キリストに属しているという自分たちの立場を理解することこそ、聖さについての命令を果たす土台であり、その出発点です。私たちが「聖なる者となる」のは、恐怖からではありません。私たちのために御子を与えてくださった方への敬意と畏敬と愛のゆえであり、また、ご自身の血、すなわち十字架上で私たちの一つ一つの罪を贖われたご自身の霊的な死によって、私たちをすべての罪から贖ってくださった方への敬意と畏敬と愛のゆえなのです。私たちが間違いを犯し、判断を誤り、罪を犯したからといって、世界が終わるわけではありません。しかし、もし私たちが本当に、自分のいのち以上にイエス・キリストを愛しているのであれば(そして私たちはそうであると告白してい

¹ 背教(apostasy)は、キリストへの信仰を完全に放棄し、不信者の状態へ戻ることによってのみ起ります。これについては、BB 第 3B 巻「背教と死に至る罪([Apostasy and the Sin unto Death](#))」をご覧ください。

² 神からの懲らしめ(discipline)がますます強められても、なお断固として応答することを拒み続ける信者の場合には、「死に至る罪」に至ることがあります。これについては、BB 第 3B 巻「背教と死に至る罪([Apostasy and the Sin unto Death](#))」をご覧ください。

ます)、神の懲らしめを恐れること以上に、愛する主を失望させ、主のみこころに従わなかったことを悔やむようなことだけは避けたいという思いのほうが、私たちを強く動かすはずです。私たちが日ごとの霊的前進の中で主に近づけば近づくほど、主が私たちをどのように見ておられるかが、私たちにとってますます重要なものとなります。そして、神の御言葉の真理という揺るぎない土台の上に立つ信仰の目によって、目に見えない方をいっそう明確に見るようになるにつれて、私たちは主によりよく応答できるようになり、また、よりよく応答できるようになります。私たちがイエス・キリストとその真理について学び、信じれば信じるほど、真に聖なる生活を送る力も増していきます。それは、外側に表面的で見せかけだけの変化を加えることなく、内側から本当に変えられ、その聖化をこの世において表すことです。それによって、私たちを買い取ってくださり、ご自身が聖なる方であるように私たちも聖なる者となるよう召してくださった主、私たちの愛する救い主イエス・キリストに、栄光と誉れが帰されます。私たちが応答したいと願っているのは、この方に対してです。そして、私たちの行いや振る舞いが映し出すのも、この方なのです。

「イスラエルの全会衆に告げて、彼らに言いなさい。『あなたがたは聖なる者でなければならない。わたし、あなたがたの神、主が聖なる者だからである。』」([レビ記 19 章 2 節](#)/NIV 訳)

[ペテロ・シリーズ #31 に続く]